



岷江入楚

御法

才武九

特別
~ 12
4604
39



94
12
4604
37



佛法

五十一歲 薰三茶

紫上病惱不存復請出家服法事

三月十日紫上伏養十部法華經

紫上遂消息書明石印方事

法舍早各還六茶院許事

及二茶院病惱明石中文行啓事

任二茶院對許事

紫上反白文地啓事

原氏君中文亦佛法啓事

八月十四日明方紫上率玄書

六茶院作大功德書上佛法啓事

大功德身見空悅事

紫上蘇道事

六茶院出法事

致仕大臣詔六茶院給事



伏好中 文相之系流新書

浄法 卷以哥号

何の^レ浄法か^レたの^レ世を^レ中^レれ^レり^レハ
源氏^ノ五十一^ノ氣^ノ春^ノり^レ林^ノあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣
紫^ノ上^ノは^レ林^ノを^レ治^レり

世の^レい^レは^レる^レ後^ノの^レ後

と^レも^レあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣

と^レも^レあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣

と^レも^レあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣

と^レも^レあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣

と^レも^レあ^レる^レなり^レあり^レる^レ矣

世の^レい^レは^レる^レ後^ノの^レ後

深のきんをばきしりし
さうしきとくれきおしぬらんしをこ
源のあんこ

んけしあんらあ
紫上ん中二身

うらわさるけしーたよ
紫上るあ子れか死んあれもほ成れあ歌き新ん

あをかれーいりふこ
あ子れたしきといりり 何身

るかけしきしきまけしん
紫上るたきしきりあれらる同

かいあもはま
いほとくー死とし

さういりあんも
紫のあんこ紫上れあむきぬりれをよきりりて
たうーし

木ありしらとれまをともん

何 若留半庄業華業 待我同信同行人 法然上人 五會證 紫

あなうけいあ
世をともくし世おくおこるあめのみ

おれ山あわともんをいり
あやしあしあおかりんとあふ後世れ一蓮とくの
りーくしあん

いんくしあ
紫上るあんらあ

たうらあわし
あえんあ人たああされら
今業あされんあ創の家あ初に知あああ東院道世れ

しと明あ上いあああああ詞た板あああああ
あうああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああ

おはる言はれわされしと云々と知りし久しき事
いふも言はれし心は花実よわししちかすこと
河海よわされし人せられしなり
其後こそ文字書丸

花もよわされしと云々と河海よわしと云り河海
の流物いふなり 其後同

河海よわしと云々と云はれしと云々と云はれし
こと抄云河海よわしと云々と云はれしと云々と
云々と云はれしと云々と云はれしと云々と云はれし
えの字もよわしと云々と云はれしと云々と云はれし
あさしと云々と云はれし

古ゆりしと云々と云はれしと云々と云はれし
源ゆりしと云々と云はれしと云々と云はれし
よの身をもいふと云々と云はれしと云々と云はれし
その子もいふと云々と云はれしと云々と云はれし
よらぬ身をもいふと云々と云はれしと云々と云はれし

と云はれしと云はれしと云はれしと云はれし 其例

けがれをゆりしと云はれしと云はれしと云はれし

よかく坊のありしと云はれしと云はれし

私秘弄ありしと云はれしと云はれし

やけにわらわし

紫の逆巻千部いふかせられしと云はれし

おとくしと云はれしと云はれし

源のいひしと云はれしと云はれし

由美よまといふのまも

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

明石女御立成事ありしと云はれしと云はれし

このみのもつてゐるおれもやと見んて
かゝりまゝのれといひていへ 笑矣

この世のつらさおれもやと見んて
一やを教へて世へいりておれとわらひ見ん海
河海にんていへ 笑のあまうりまゝとくしとみや
たらしる言と

笑 抱んをいふとありまゝおまゝに是も業よのり
このわの笑とんんといへ
ありんといふのを
チニ系信也

あしれやれこれ
女 業上り 懸守り
笑 雨は壁をぬりてきて 洞交ちとてくも
仙のおいともいふのをいへ
穢土草庵密嚴佛圓光一儀

又いふ此不をいへれ極赤花殿と名をいふから
ことなるいふもいふ人といへ

大いこれ結縁といへんも功徳ありといへ
たしとて家いんといへれあつても

笑 八海にありし一巻の五巻の日とて中日とてけ新ろ
行通わり行基菩薩の方とてなり明ありて行
通わりといへ

法無道をわらへりといへ 勤むらむといふつとて
提婆も採薪及菓蔬 隨時 恭敬興
さんさんとていへ 讚歎といへ 大念を讚歎といへ

法則といひわらへいへ
私にいふといへいへ 法といへ 畧いへ

笑 見聞の難人群集此神をいふとわらへいへいへ
歎かすは凍臍といへいへ
いへいへいへいへいへいへいへいへいへいへ

わぬとくくゆかすし

三まーて

白文也 矣

權

このま採葉汲水の心は身を葉にまじりてゆく

早下まつるをよとすけりていつりしりし

其の身葉よまじり

け身採葉汲水れんりたりたわりの常よりけり

方はお入を餘但繁如新を火滅仏化の縁をく

但繁み入れし也

身葉に取あすんつさく 心は火滅の縁にけり

子蔵給任、新まわをもめ新を火滅たさき也とて

あふりんかきさき也

大書のの返答と心はさきさきとて心は火滅

取しつてとてとてとてとてとてとてとて

身葉に取あすんつさく 心は火滅の縁にけり

採葉汲水拾薪設食 于時奉事 經於千歳 提摩品

公かりたをらに採れきとて心をくればとて新取をく千歳

給仕の心くみとて世あり久しとて心は火滅

心は火滅の縁にけり 祝の心くみとて心は火滅

心は火滅の縁にけり

于時奉事 經於千歳 提摩品 千歳給任、心は千歳の給

任をくみとて心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり

たしとて心は火滅の縁にけり

け鼓に撃年教宣令 提摩品 心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり 心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり 心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり

心は火滅の縁にけり 心は火滅の縁にけり

葉上ノ心法もくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

葉上ノ心法もくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

通典曰大而出於山於南陵王長恭可武而顯恭帝著位
而以對敵當年擊平周師金墉城下骨冠三軍并人壯
之為此舞以効其相慶報之容謂南陵王八陣曲
尾張僧主云高野天皇倒好計由仍奏御前還入時又
吹沙隱調入有脚以安麻力入者此古先所傳也案之
陵王り急なり一只早と急なりとリ小の鏡多
急れんこ

武説新羅陵王急な件 由急上太鼓也

河海も況其の用し 葉
破急な

見れ人のぬさけけ

葉上ノ心法もくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

のりりもくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

葉上ノ心法もくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

葉上ノ心法もくも長よとありて
標ノ字カワリ
百子とれはしはり

を交らうしめさく

^世上 是の限りあるんぞ

たえぬことありけりたのまらうにむすふけれ契を
御法に身をまへり同法に値過はまもるなりきと
今日の縁をばせられぬ我身世をばぬとも同法に
契はるありきと

契 二ノ身とけいする身とせむと結ふ法に値過のふもあ

らんといふべし未だ法にふもや又あつた

何 願我生に見諸佛世恒同深妙典恒修不退菩薩

行 正等契 花教里と世と中とありき

世に教里と契はる一と大に縁をせくらんありきとも

契 明石六思推をて後人のしとて言て縁にあり

契 明石のありのまへにわらうる里に性

契 明石の明石上よりありてるるるすたあり

契 明石の人にはありきんんんあり

^契 明石の性よりあるありきありのありとあり

明石の性をばせしとてはるるに但て大に

契 明石の性よりありてはるる人なる

我身はるるありき 契同

けはのくわんんの縁せんがや

契 不明法 懺法

契 ありき

契 明石の山に培くわんんの念ありき

契 明石のありき

契 明石の病中の性よりあり

契 明石の病中をばせしとてはるるに

契 明石の病中をばせしとてはるるに

契 明石の病中

契 明石の病中をばせしとてはるるに

行啓あり矣

又 明石中宮

養立后はあはれとあり

又 明石中宮の養立の養子なりとあり

東の對面ありしをいひしはこれなりとありしをいひしは

西條院の東對面中宮の御所なりとありしは養後より

東よりいひしは中宮南院とありしはこれと養後

養上と云ふなり

二茶院の東に在りし中宮は此の御所なりと云ふは

西條院の西對面中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

此の御所なりと云ふは

此の御所の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

此の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

此の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

此の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

此の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

又 明石中宮の御所なりと云ふは

凡と絶たしとまらりて

中文孝脚語經

其のころあつたり

其のころあつたり 對してこれとなく孝語經了たこれ

中文孝脚語經にけしよまされりしとなく世上方より

之りは下り 兼曰花鳥現る中より下りしよま

二条院のりしよま 三光自筆

兼曰花鳥現る中より下りしよま 兼曰花鳥現る中より下りしよま

松ヶ末ノ詞は兼曰花鳥現る中より下りしよま

中文の又世上方より下りしよま

まぐらわたりしよま

ららんを但兼曰花鳥現る中より下りしよま

三文のあつたりしよま

白雲部文に丑儀なり

兼曰花鳥現る中より下りしよま

まぐらわたりしよま

兼曰花鳥現る中より下りしよま

白まれのりしよま

兼曰花鳥現る中より下りしよま

白まれのりしよま

兼曰花鳥現る中より下りしよま

兼曰花鳥現る中より下りしよま

兼曰花鳥現る中より下りしよま

若人散乱心乃至以一華 供養於畫像 衛見先教佛

曾非種處思元亮 為是花時供世尊 菅定

おのまといゆまよと
けまの白く いりまの女一まこ 矣

ねとをいれいふとかまう
かこつけいふまうまこ

とまのれは花をいふいふ
さうまのれはむらりれ

何れわくいふまのれはむらりむらり
秘 笑同引し

中まのまのりねんときりね
笑内裏へまのりねんとき

おのとのうまのれはむらり
とまのりいふまのれ

笑禁上へまのれはむらり
せまのりいふまのれ

内のははらひの

内裏へむらりいふは

あまのりいふはむらりいふは

禁上へ中まのりいふはむらり
まのりいふはむらり

禁上へあまのりいふはむらり
二条院へ中まのりいふはむらり

病中へれいふはむらり
まのりいふはむらり

あまのりいふはむらり

禁上へ振籍自由ノ祈られまのり
らりいふはむらり

こまのりいふはむらり
禁上へ祈り 矣

いふまのりいふはむらり
わびくと前へあまのりいふはむらり

わびしくと地ノあぢやうのり

ふのせれたのつわり

楓子ニあましくとくうらまへ〜

ゆとなく吹いて〜

中まとの地獄〜

このうらみわ〜

中まのふあ〜

あうも中まとの地獄〜

見あふともん〜

紫上ノん〜

はあ〜

妙なる〜

なくとも〜

どくと〜

はう〜

のほ〜

まよ〜

枝の〜

庭を〜

夢現〜

〜

か〜

身よ〜

〜

何〜

末の〜

や〜

引〜

母の〜

〜

夢〜

せ〜

やせせし 勅やとんじ

秋風よ三つしつらぬあはれ思ひし事葉のうへとのこらん
何の處の秋の風よと死なむと事葉の上と行ふ事せん

愛川一

中又れ山より世をたを幸ととり物かともよとねとら
つをとりとるあれれ

よあしつらし 花あこころも

源中又の葉と

くして子と物致る事

おれはつらよ命をのちあかしくいふ事とてせんあはれ

愛川一

不常任れれ

とわらうとせ路わね

葉上中又へトのよ句

いとあけみゆりや

終焉まうれとていふらんはくはくさくさく

さびしくもがくしていふつらく

おのけれなやとおく生るり花ひしす前よわり

まもるり 花さくこころまわり花はるたりかくあか

いまもれとらやをこりよと中又にかまわりはくはく

さるりや

つらわあくといはれ終焉をこねつらとをわくくも又

一入のあくもあか

明くれのそよ

世上のそよをいふあつらひもさるれも只はすしつりの

板よそ路よとていふれ明國に秋あはれわらふ

あし

あつらひとらん

あつらひとらん

あつらひとらん

あつらひとらん

あつらひとらん

あつらひとらん

そら音の木丁を引わさく

御さるあらしのうらやうはひるくまりのゆき

源氏の上上のうらやうはひるくまりのゆき

その木丁の田刈らう

この書れのうらやうを

ついでに

かくらうは

源の詞也

ふのくまのりわけ

はひるくまのりわけ

ふのくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

よよはぶしおれやううらやうはひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

はひるくまのりわけ

とるくといひらし辞
舞飲れ此のさばに

いよしーいさおちかんといとらた相水く
あられちるさゆ
穴眼あゆむらりしてくまらりて

源氏からく野はおろくみえくしり契
.
舞舞上れ時と神よむねりり
いひしーいさゆ

.
美原氏の上天皇山くおんとれに
たねれ鳥のおんてま

舞上しつね路ひし時のすをさしーいさ
月のふれあささふ

舞上二月廿日舞送し
舞上れ時にあをともみねりし

十のりふりせ路むくこれ千名れ鳴るわりり
何
十のりせ路十のり鳴舞送し武抄十のり音ノ舞上

十五日の紫上ともあり僻しし

ある紫上も舞上し舞のまのさ日敷をある鏡あはと
月のつかのさ舞送れまといさ
紫上十六のりちて十七のりやわく舞まあるはに

日といさやふ
帰れねぬ
神へのあさわられらるくむちて

美原氏のありのさふさふく神のなふんたり又高名
いささいゆれ世に一節しつせられくささ
ひりーいりのあわい

源氏山舞み舞
いささいのりれらる

かやれ時世をむくいさくしーいさ
いさのまかしーいさ
たねのさりせ

九神をくちく

夢社をたやうなる / マ ちねのら

わーしや

夢社をくちくは （？） 昔は社をたやうなる

又このりの （？） のら

終身の時 （？） 夢社をくちく

何 念珠の海のおとい （？） 夢社をくちく

何れをく

夢社をくちく （？） 夢社をくちく

何れをく （？） 夢社をくちく

ねん （？） の （？） の （？） の （？） の

つ （？） の （？） の （？） の （？） の

り （？） の （？） の （？） の

か （？） の （？） の （？） の

い （？） の （？） の （？） の

後 （？） の （？） の （？） の

夢 （？） の （？） の （？） の （？） の

九種かゝるく

夢社かゝるく マ ちねの心

わーしや

夢社かゝるく マ ちねの心 マ 終身の時経ひしや

又この時の時経ひの心 マ 終身の時経ひしや マ 終身の時経ひしや

何 マ 念珠の海のおとといふ マ 念珠の海のおとといふ マ 念珠の海のおとといふ

か マ 孫勝の心

不及けなれ マ 孫勝の心 マ 孫勝の心 マ 孫勝の心

い マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

夢社かゝるく マ ちねの心

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

あ マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕 マ 一の林の夕

それと共これに我々のうり返はしく言つてけり我々の
誇るる河なり
家かこらのをくれさるすこしをくれさるすこし人な
ふとぬる男をせせ

いづけなきに程なりぬれくつねなき世に

徳氏者これより母をよとくれぬすこし

母又衣外祖母有重帝おとにけれぬ私家重重重重

仏おしの申しんさるあへく

世々重帝一返さるしれとの仏の方便と持りよむと
ぬれとせ

ぬりしれとかがゆるぬれ

仏のころさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

内裏よりありて

内裏よりありて

内裏よりありて

内裏よりありて

内裏よりありて

おとてむさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

さるさるさるさる

おとりりしるらんのおとよ

家源の物おぬれおとりしるらんのおとよとけ地なるれ

さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

けさわるとし

ちどのおとあつたをかりさるさるさる

家源は左片かやぬれをさるさるさるさるさるさる

さるさるさるさる

者ららのお母

家源は左片かやぬれをさるさるさるさるさるさる

おのれおとよ

さるさるさるさる

此身は成りしにこそありて
必 夢上をたしめ給へし父母とまはりてあり給へし
うと給へしとこれ故に記し給へし
とこれ記し給へし

未だおもしろし給へし

後任の六男あり

の休むとておれりておれりて記し給へし

夢上をたしめ給へし

夢上をたしめ給へし

とのらりしとておれりて記し給へし

世に記し給へし

世に記し給へし

世に記し給へし

私夢上をたしめ給へし

おれりて記し給へし

おれりて記し給へし

私夢上をたしめ給へし
とのらりしとておれりて記し給へし

おれりて記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

徳傷も記し給へし

河川
新井
相模
いしと
あつた
の

秋好中え

私明石中えりも秋好の尾た底たれぬくわん
 一しすたのいづれもなまかりし但あ中えん
 かれふゆれつるしとむり秋の秋よんをさうさあかん
 秋のあつたのすく
 葉上の春よんをさうさあかん
 たりしすたのいづれもなまかりし但あ中えん
 かり地のかんをばかす可なりわとさうり秋
 上の秋よんとさあかん
 いふりゆかむむげをさうさあかん
 秋大異日一

私かれつるとは是れよせつる事とす
 くらんことり
 秋をさうさあかん
 うりふしおきこくんのよ

保代一人

あけまゝしちも奇おもる事とす

も感一してくらんことり
 秋をさうさあかん

のゆりしちかみおとさうさあかん
 秋のあつたのすく
 葉上の春よんをさうさあかん
 たりしすたのいづれもなまかりし但あ中えん
 かり地のかんをばかす可なりわとさうり秋
 上の秋よんとさあかん
 いふりゆかむむげをさうさあかん
 秋大異日一
 私かれつるとは是れよせつる事とす
 くらんことり
 秋をさうさあかん
 うりふしおきこくんのよ
 あけまゝしちも奇おもる事とす
 も感一してくらんことり
 秋をさうさあかん
 のゆりしちかみおとさうさあかん
 秋のあつたのすく
 葉上の春よんをさうさあかん
 たりしすたのいづれもなまかりし但あ中えん
 かり地のかんをばかす可なりわとさうり秋
 上の秋よんとさあかん
 いふりゆかむむげをさうさあかん
 秋大異日一
 私かれつるとは是れよせつる事とす

あられみお引りせとよや

私言は舞の姿に花の姿同し

そりつてこくとこいりわらわらあはくおいあ

道よはつていそと志いしけりあつていそはあはつ

これをもやとて原のまねかゝるおのちかたて

とさるありのあはれもいふもいふもいふもいふと

とくともさもかたて

女つこふれたりしす

源氏の心を記さるまゝいおん

仏の心よん三つて

女つこわくもあまういおんいおねとよとわ

とらえりそのあはれとくは

ふれと人そいほ

あすちをりてあまういよいおあはれしと世歎

のあまわい

おさうれきりとも

追善はよし

これいそいけりす

源のまろくと作れぬとよ

けやれいあつて

世ののちよとてやいとるあはれと秋

えりあつてりあつて

奥 年月日

年たれれらるる

中文字もお引りあつて時のまねかゝるいそいそ

明石中ま

手奥勤 羅陵王 古未有舞 中曲舞 次才とん小乱声 次時三度

二度决响序 次音取 次荒序次入破次安摩急此
時舞入又二度用
應安三年三月八日右近将監豐原英秋件自筆
譜元正元紹牛於浙前寫今私写也



